四つのイドラ

杉谷 伊吹

皆様こんにちは、如何お過ごしでしょうか。

私は、年末の大雪の最中にこの原稿を書いております。終わりの見えない除雪に限らず、大小の苦難が日々押し寄せてくるのが人生ですが、そんな苦しみを感じている時に、私がよく考えることについて今回は書こうと思います。

苦しみとは何処から来るのでしょうか。自らの内面で起こる心の働きではありますが、他者との接触が起点となっている外部刺激型が、まず思い当たります。また、自らの肉体・精神によって呼び起こされる、他者を介さない自己完結型もあると思われます。では、外部刺激型では他者または自分、自己完結型では自分自身が苦しみの原因なのでしょうか。より客観的な視点で見てみると、自己と他者だけでなく、環境や背景が大きな要因となっていると考えられる場合があります。

仏教には「五濁悪世（ごじょくあくせ）」という世の中の捉え方があります。それは生きている限り避けられない五つの環境要因を挙げたものです。その中に、「見濁（けんじょく）」という、思想や見解が混乱して、現実世界が濁っているかのように思えるという状態があります。

この見濁（けんじょく）に近いと思われる考え方として、イギリスの哲学者、フランシス・ベーコン（１５６１～１６２６）の説いた「四つのイドラ」があります。「イドラ」とは、ベーコンによれば、正しい認識を妨げる先入観や偏見といった、人間が無意識に持つ、認知の歪みを指します。（イドラはラテン語では幻像という意味です）

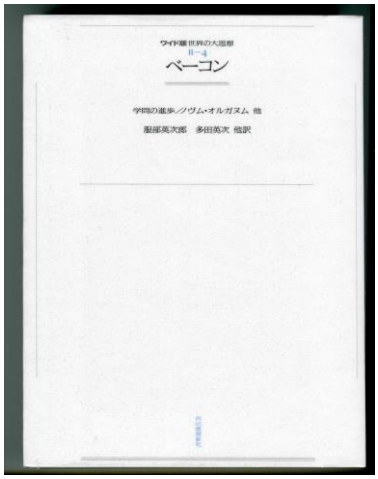
一つ目は、「種族のイドラ（自然性質によるイドラ）」です。これは、人間という種族はそもそも物事を正確に捉えることが難しいという説で、例として錯覚が挙げられます。

二つ目は、「洞窟のイドラ（個人経験によるイドラ）」です。これは、人は自らの経験によって形作られた常識の範囲内でしかものごとを捉えられない、ということを洞窟の中にいる状況になぞらえた説です。

三つ目は、「市場のイドラ（伝聞によるイドラ）」です。これは、人間が言葉で情報を伝える際に起こる語弊や誤解、あるいは適当でない言葉の使い方によって、間違った思考に行き着いてしまうという説です。

最後は、「劇場のイドラ（権威によるイドラ）」です。これは、世に影響力を持つ権威から発せられる思想・学説が、たとえ間違ったものであっても民衆に無批判に受け入れられてしまうという説です。いつの時代でも綺麗に整えた机上の論というものが、権威にとっても民衆にとっても安易で都合がよく、また、はびこりやすいのです。

私たち人間には、これら「四つのイドラ」が備わっているようです。みなさん、思い当たる節はあったでしょうか。私は、これらイドラが人間の苦しみの元となる重要な要素だと思っています。そもそも本当に自分は苦しんでいるのだろうか、認識が間違っているだけなのではないだろうか、と考えることがあります。思い悩んでいる時には、もしや自分はイドラに惑わされているのではないだろうかと疑ってみてください。人間の存在の背景にあるこの最も身近な不都合にこそ、本当に向き合わねばならないのではないかと思うのです。



参考文献：ワイド版世界の大思想
『ベーコン　学問の進歩／
ノヴム・オルガヌム他』
河出書房新社　2005 年

あいち２０２２

杉谷 紬

二〇二二年七月三〇日から十月十日にかけて開催された国際芸術祭「あいち２０２２」を鑑賞しました。二〇一〇年から開催されてきた国際芸術祭「あいちトリエンナーレ」には前回を含め過去二度訪れていますが、今回、名称を変更しつつどのような展開を見せるのか会期前から注目していました。

今回の芸術祭のタイトルは「STILL ALIVE／今、を生き抜くアートのちから」ですが、この言葉の直接の由来は、愛知県文化芸術センターで展示された河原温の作品に登場するフレーズです。会場に入るとまず、膨大な数の「I AM STILL ALLIVE」と打たれた電報の作品を目にすることになります。そしてこの作品を起点にして、展示を追うごとに「STILL ALIVE」という言葉に幾重にも意味が加わってゆく見事な構成となっていました。

そのことは、本来は美術展示施設ではない場所で展開された展示において、より感じられるようでした。それらの会場では作品を一点一点探しながらまちを歩きまわることになるので、その間に同行者と作品について語らったり、まちを眺めながらその土地の文化的背景について思いをめぐらせたりすることになります。展示される場所への取材に基づいて制作された作品も多いだけに、作品をより深く味わい、土地の風土に根差した、説得力のあるものとして受け取ることができました。

今回の芸術祭は、過去や未来、近くや遠くの様々な事象に言及しつつ、その「複雑さ」を複雑なまま引き受け提示してみせる、というような作品が多い印象でした。これは非常に地に足のついた誠実な態度だと思いますが、同時に一見しただけでは分かりにくい作品という印象につながることもあったように見受けられます。ただし、それらを複雑で雑多な町の中に配置し、探す時間を含め時間をかけて鑑賞するよう仕向けてみせたことは、見る側をじっくりと作品に向き合える状態に導くための働きかけとして、とてもよく機能していたように思われます。

特に印象深かった作品は、常滑で展示された田村友一郎の《見えざる手》でした。かつての製陶所の倉庫を改装した「常々」という建物の外階段を上り、展示場所の入り口をくぐると闇の中にぼんやりと木の柱や梁、そして等身大程の大きさの三つのモニターが浮かび上がります。モニターには人形浄瑠璃を操る黒子のような恰好をした人物が一人ずつ映し出され、三人でなにやら話をしています。

アンナ・イムホフ《道化師》展示風景
会場となった一宮市スケート場は、2022年３月末をもって惜しまれつつ閉業した。

この作品では、瀬戸と常滑における輸出用の陶製人形の盛衰を、一九八五年の「プラザ合意」の顛末や経済論争を交えながら語ってゆきます。雰囲気のある暗い室内に、モニター画面の背景も暗く、まるで三人がそこで実際に会話劇を演じているような錯覚に陥ります。室内のあちこちに配置された陶製人形や資料なども映像と相補的な関係にあり、共にこの空間を作り上げています。

今回の芸術祭の会場には、人々の記憶が染みついた廃施設や再活用されている施設が多数採用されています。それらを見るにつけ、また、まちの様子を観察しながら歩く中で、会場となったまちで現実に直面している問題、そして過去からの移り変わりとこれからの行く末について考えずにはいられません。とりわけ経済的な側面についてはことさら意識させられますが、そうしたなかで、常滑という場所を踏まえ、世界経済と重ね合わせながら考察する作品があったことは非常に意義深いと思っています。

愛知県での国際芸術祭が、今後どうなってゆくのかは分かりません。しかし、今回の芸術祭ではアートに向き合うことで、私たち自身に向き合う機会となっていたことを高く評価したいと思います。これはアートの重要性を再認識する機会でもありました。なぜなら私たちは、今ここに立ち、生きていくのですから。

本の紹介

チ。―地球の運動について―

全八集　作・画：魚豊（うおと）

２０２０年～２０２２年　出版社　小学館

杉谷　淨

題名の「チ。」は三つのチを意味しています。第一の「チ。」は、地球を中心に宇宙が回っているという天動説に対して、地球が太陽を回っているという地動説の「地」です。

時代設定は、中世ヨーロッパ、天文学者コペルニクス（＊）が登場する直前です。天体観測により地動説を導き出した者たちが、絶対的な権威を持つＣ教によって異端者であると審判され処刑されていきます。これが第二の「チ。」である「血」です。Ｃ教というとキリスト教を連想しますが、キリスト教会はコペルニクスを批判していませんし、一世紀後に地動説を唱えたガリレオも、異端とされ軟禁されますが処刑はされていませんから、あくまでも架空の教団です。

作品の中では、Ｃ教の教えを信奉する者、Ｃ教は信じているが教会の教えが間違えているとする者、神は信じているがＣ教は信じていない者、無神論者など、様々な信仰を持った者が登場し、単なる善と悪の対立としてではなく、信仰とは何かという問題を投げかけているように感じます。

物語の中で、ある登場人物は、学問とは真理を求めるものであるから「自らが間違っている可能性」を常に肯定するのに対して、信仰とは信によって得られる安寧を求めるものであるから「第三者による反論を許されない」ものであると語っています。これでは学問と信仰は相いれないものであることになり、同時に異なる信仰を持った者同士も相いれないことになってしまいます。実際に世界を見ると異なる宗教同士の争いが絶えることはありません。

信仰の内容が世代を超えても変わらないものならば、争いは終わることがないのでしょうが、実際にはいかなる宗教も時代とともに教えは変化しているのです。このことを作中の人物は、人の命が限られたものである限り信仰の内容も後に続く者に託さざるを得ず、その「託す」ということ自体が本質的に「反論や訂正をされること」を意味しているためであると言っています。ですから信仰も学問より歩みが遅いとはいえ変わり続けているのです。問題は変化が融和の方向に向かっているのかどうかです。

現在、多くの宗教は学問と対立していませんが、一部の宗教では、進化論を否定しているなど、いまだに対立が残っています。それどころか、以前にも増して強く学問を否定する原理主義的な宗教理解までが一部で広がっています。宗教以外でも、アメリカのＱアノンのような、他者の意見に全く耳を貸さない極端な思想団体や政府が世界に広がっています。このコミックの舞台である中世から比べると、はるかに教育が行き渡っているにも拘らず、この様に一部の指導者の言葉を鵜呑みにして、自ら考えることを放棄してしまう状態が広がることは、大きく時代に逆行する動きに見えます。

作中の人物は「権威の中で生じる思考停止は、何も宗教だけじゃなく学問って物の中でも起こるんじゃないですか」と、権威によって疑いを受け入れない「思考停止」に陥る危険性が宗教に限った問題ではないことを示唆しています。どれほど権威を持った組織や人物の言葉であっても、間違っている可能性を排除せず、自分の考えで判断を下すことが大切です。その判断をするために必要なのが知性です。第三の「チ。」は、まさに「知」です。自分で考えることを怠らず、知性を身につけようと努力し続けることこそが、互いを理解し合う上で重要であることを、このコミックを読んで痛感しました。

＊コペルニクスは、十六世紀の聖職者でもあり天文学者で地動説を発表しました。

徳法寺からのご案内

心の相談室

毎月第四土曜日の午後三時から午後五時まで

横安江町商店街にある「いちょう館」二階にて、真宗大谷派の僧侶による「心の相談室」を開いております。個室で相談をお受けします。仏事はもちろん、家庭や職場、学校など、どのようなお話もお聞きします。相談は無料です。予約も必要ありません。

相談内容は一切外に漏れることはありませんので、お気軽にお訪ねください。

サンガ茶話会

毎月第一木曜日の午後三時から午後五時まで

横安江町にある東別院敷地内「真宗会館」一階囲炉裏の間にて「心の相談室」スタッフによる「サンガ茶話会」を開いております。座談形式となっています。僧侶やその場に集まった方々とお話しませんか。いろいろな方に聞いてほしい話、聞いてみたい話がある方はお気軽に参加してください。他の参加者の話を聞いているだけでも構いません。参加は無料です。予約も必要ありません。出入りも自由ですので、途中参加、途中退室でも大丈夫です。お茶とお菓子を用意してお待ちしておりますので、お気軽にご参加ください。

徳法寺 仏教入門講座

毎月二十一日午後七時半より

講師　徳法寺住職　杉谷淨

三月　鎌倉仏教　十二　日蓮と日蓮宗
四月　鎌倉仏教　十三　一遍と時宗
五月　鎌倉仏教　十四　その他の鎌倉仏教の担い手と神道の芽生え

日蓮は、他の鎌倉仏教の諸師方とは仏教に対する視点が大きく異なっています。その特異性をお伝えできればと思います。

時宗の祖とされる一遍は、その思想性や当時の社会に与えた影響力も他の祖師方に引けを取らないものであるにもかかわらず、時宗自体が急速に勢力を縮小させてしまったため、現在はあまり取り上げられることが無くなりました。なぜこの時代に受け入れられたのかを探ります。

近年、祖師とされる方々以外の、この時代活躍した僧たちが注目されるようになりました。現在、祖師と仰ぐ教団がないことから、時代の脇役のように扱われてきましたが、実は親鸞や道元などよりも大きな影響力を持っていた、鎌倉仏教の担い手であったのです。また、神道が徐々に形成されてきたのも鎌倉時代でした。

参加費はお賽銭のみです。どなたでもお気軽にご参加ください。

徳法寺春彼岸展

マット・マイヤー妖怪百鬼夜行イラスト展

三月十八日（土）から二十六日（日）まで

福井県で、日本の妖怪を世界に紹介しているアメリカ出身のイラストレータです。彼の視点を通して描かれる個性豊かな妖怪たちを見に来てください。

春彼岸法要及び永代経法要

三月二十一日（火・祝）午後二時から午後四時まで

読経の後、当寺住職の法話となります。

表題揮毫　中田　八千代
徳法寺　石川県金沢市野町二丁目三二番四号
TEL　０７６（２４１）５２１９
ホームページ　http://tokuhou-ji.com